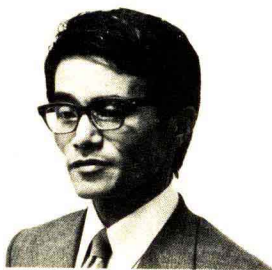




タムバ たいの魔王^{まおう}

中国(ウイグル)民話
新村 徹・文
加藤 義明・絵



加藤義明（かとう・よしあき）

一九三一年、大阪に生まれる。大阪市立天王寺美術研究所で学び「日本アンデパンダン展」出品、日本美術会会員。一九六六年初の「きり絵作品展」開催。以後毎年個展ひらく。絵本「おおきなおおきなおおきななし」。
NHKテレビ「けったいな人々」タイトル画担当。



新村徹（しんむら・とおる）

一九三六年、京都市に生まれる。戦中の学童疎開派。長じて中国文学を専攻。愛知大学、東京都立大学大学院の中文科にすすむ。子どものころから大好きだった児童文学にひかれて、中国児童文学・民話を研究する。現在、桜美林大学中文科講師。著書に『鲁迅のころ』（理論社）、訳書に『巨人ニジガロ』『チワンの星』（日中出版・共訳）。絵本に『おおきなおおきなおおきななし』（新進）など。

基本カード記載例

N.D.C. 923	新村 徹
クルパンの魔王たいじ	
文研出版 1975 80p 23cm	子どもランド

訳者 新村 徹 発行者 佐藤 武雄

発行所 文 研 出 版 東京都文京区向丘 2-3-10 大阪市天王寺区大道 4-128

© 新村 徹 1975

印刷所 西口印刷株式会社 / 製本所 倉橋製本株式会社

BS-751101

● 著者との契約により検印廃止

タルバンの魔王まおう たいじ

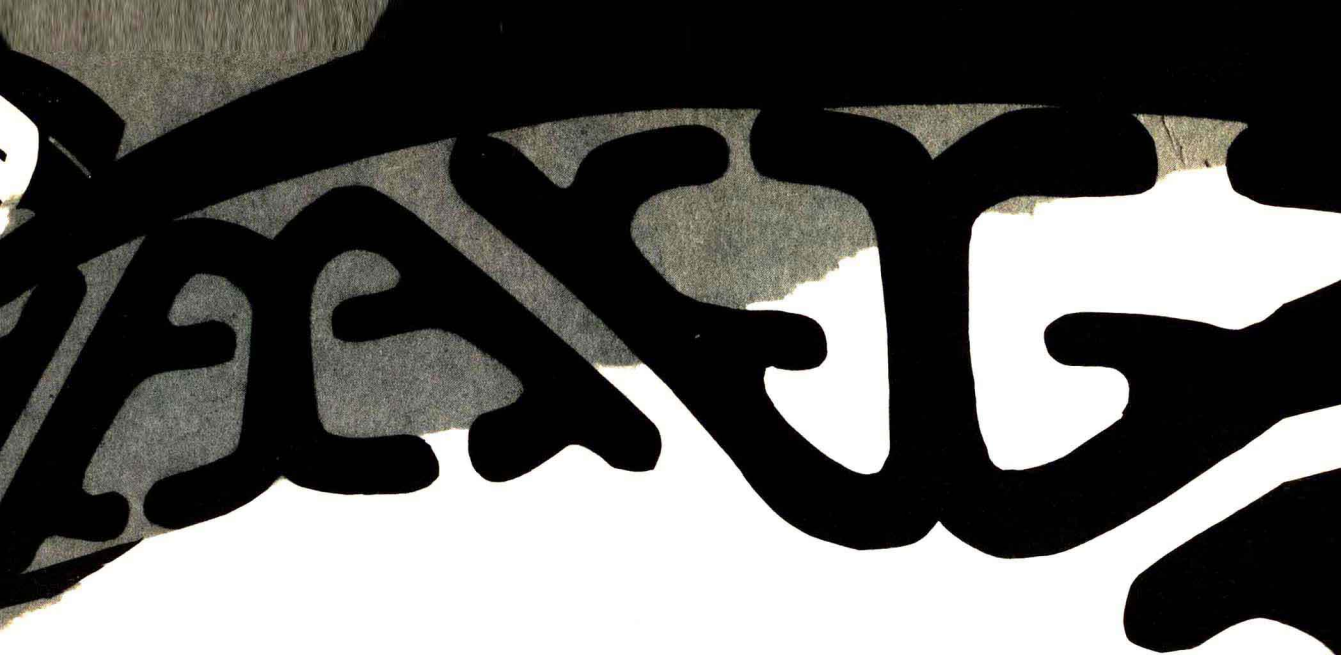


中国(ウイグル)民話

新村 徹・文

加藤義明・絵

文研出版



クルバン、	生まれる……………	6
クルバン、	母 ^{はは} をたすけだす……………	12
クルバン、	都 ^{みやこ} へいく……………	21
クルバン、	竜 ^{りゅう} をたいじする……………	27
クルバン、	バトルたちをうちまかす……………	40
クルバン、	魔王 ^{まおう} にであう……………	48
クルバン、	魔王 ^{まおう} をやっつける……………	59
クルバン、	難 ^{なん} にあう……………	68
クルバン、	難 ^{なん} をのがれる……………	73
クルバン、	家 ^{いえ} に帰 ^{かえ} る……………	75









クルバン、生まれる

むかしむかし、ずんとむかし。

ひとりのおばあさんが、マリクというむすめとふたりでくらしていた。マリクは、生まれつきかしこく美しいむすめで、そのうえ、たいそうはたらきものだった。母親は、むすめを宝のようにかわいがり、むすめは、母親をそれは大事にしていた。ふたりは、いたわりあい、たすけあいながら、まずしいくらしをおくっていた。

マリクのとしは、十四才。母親といっしょに、山でしばをかることもできた。ところが、この村の人たちは、みな近くの山でしばをかるものだから、あたりの山は、長いあいだにすっかり丸ぼうず。しばかりの仕事も楽ではなかった。

ある日のこと、母子ふたりは、そらの山をあちこちとさがしまわったが、小枝一本とれなかった。

そこで、マリクがいだした。

「川の向こうへいこうよ。ね、見てごらん。あっちには、どっさりあるよ。」

母親が見ると、なるほど、川向こうの木は、うんとしげっている。ふたりは、さっそく川のほうへでかけた。しかし、川は水が深くて、船でなければわたれない。岸へには、船があつたが、わたしでもらうお金がなかった。

そこで、母親は、船頭にたのんだ。

「おねがいだから、川をわたして、たきぎとりにいかしておくれな。家のかまどにや煙も出ないんだよ。」

船頭が見ると、母とむすめのふたりづれ、

「こりやあ、おまえさんがた、なんともきもの太えこつた。あっちさしばかりにくだと！」

「しかたねえです。ここいらの山じゃあ、葉っぱ一まいまでみなくべちまつたで。」

「あっちの山にや、でかいけだものがうんとこさいて、だれもいかねえだ。わたしやらんこともねえが、ほんとにあぶねえだぞ！」

母親が、こまて考えこんでいると、マリクがいった。

「いこうよ。山のふもとでちよつとひろって、すぐ帰りやいいんだから。おてんとさまもまだ高いし、けだものだって、出ちゃこないよ。」



船頭^{せんとう}もしかたがなく、船^{ふね}を出^だしてくれることになった。

ふたりが、川向^{かわむ}こうへついてみると、これはこれは、たきぎのあることあること。急^{いそ}いでひろいあつめ、ひとたばずつせおうと、すぐに帰^{かえ}りかけた。

山^{やま}を出^でたとき、マリクは、きゆうにおしっこにいきたくなつた。

「おつかさん、ちよつと先^{さき}にいつて。すぐ追^おいつくから。」

「はやくするんだよ。そこでまってるから。」

母親^{ははおや}は、すこし先^{さき}へいつて腰^{こし}をおろした。ところが、どうしたことか、まってもまってもマリクは帰^{かえ}つてこない。大きな声^{こえ}でよんでみても、答^{こた}えがない。そのときには、太陽^{たいよう}はもう山^{やま}に落^おちて、風^{かぜ}が木^きを吹^ふきならし、あたりはうすきみわるくなつていた。母親^{ははおや}は、あわててあちこちさがしまわつたが、どうしてもマリクはみつからない。しかたがなしに、とうとうまた船頭^{せんとう}にたのんで、川^{かわ}をわたしてもらい、家^{いえ}へ帰^{かえ}つていくほかなかった。母親^{ははおや}は、ひとりぼっちで、その夜^{よる}を泣^ないてあかした。

マリクは、いったいどうなつたのだろうか？

じつは、マリクが、おしっこをおわって、帰^{かえ}りかけたとき、その前^{まえ}に、大^{おお}きなクマがいっぱき、のっそりと立^たちはだかつたのだ。なんと、からだ中^{じゅう}にまっ白^{しろ}な毛^け

がふさふさとはえたすごく大きなクマだ。マリクは、おそろしさにガタガタふるえ、声もでない。そこを、クマは、ひととびにおそいかかって、ガツとマリクのうしろえりをくわえこんだ。そして、気をうしなってしまったマリクは、クマのせなかにのせられて、山のおくへとはこばれていったのだった。

いくつ山をこえ、いくつ谷川をわたったかわからない。マリクが目をあけたときには、ふかいほらあなのなかの平たい岩の上にねかされていた。クマは、ほらあなの外から、入り口を大きな石でふさいで、どこかへいつてしまっていた。

マリクは、よろよると立ちあがって、ほらあなの入り口へいき、石をおしてみたが、びくともしない。岩のさけ目からのぞいて見る



と、外は、底も見えないぐらいふかい谷だ。

「これじゃ、どうしたって、にげられないわ！」

マリクは、それからというもの、おっかさんのことを思っ、毎日泣いてくらし
た。なんとか家へ帰ろうといういろいろやってみたが、どうしても、クマのほらあな
かにげだすことは、できなかった。

こうして、マリクは、人里はなれたふかい山おくで、いやいやけだものといっ
しよにくらすことになった。クマは、毎日出ていって、ヤマモモや木の実、ヤギや
シカなどをとっては、マリクのところへはこんできた。

一年たつて、マリクは、赤ちゃんを生んだ。その子は、目はなだちのととのった
かわいい子で、マリクそっくりだった。ただ、からだ中にうすく黄色い毛がはえて
いた。でも、マリクにとっては、もうこの子だけが生きがいだった。かわいくてか
わいくて、いっしょうけんめい考えたあげく、すばらしい名前をつけてやった。そ
の名は、**アイリ・クルバン**。



クルバン、母^{はは}をたすけだす

時間^{じかん}のたつのははやいもの。アイリ・クルバンは、やがて七才^{さい}になった。もう、毎日^{まいにち}クマについて、けだものをつかまえにでかける。そして、帰^{かえ}ってくると、母^{はは}のマリクとその日^ひのことを話^{はな}した。だから、クルバンは、けもののくらしのほかに、人間^{にんげん}のことばもおぼえることができた。

クルバンは、としににあわず、がっしりした大^{おお}きなからだつきで、力^{ちから}がすごくつよかった。毎日^{まいにち}、山^{やま}や谷^{たに}をとびあるいているので、たいへんすばしこかったし、そのうえに、生^うまれつきりこうで、やさしいところをもっていた。

やがて、クルバンは、クマとマリクといっしょにくらすうちに、すこしずつ、なんだかおかしいな、と考^{かんが}えるようになった。

ある日^ひのこと、クマがほらあなにいないとき、クルバンは、マリクにだかれながら、たずねてみた。

「おつかあ、教えとくれよ。おつかあは、二本足で歩くのに、おとうは、四本足で歩く。これは、どうしてなんだ？ おつかあは、からだに毛がないのに、おとうは、どうしてあるんだ？」

こんなふうに聞かれて、マリクは、思わづかなしくなり、大きなため息をついて、ポロポロと涙をこぼした。だが、説明しようにも、ことばがでてこない。クルバンには、ほかのことをいって、うまくごまかしてしまった。

だけど、その日から、マリクは、また、母親のことや、長くつらいけどものの生活のことを考えるようになった。そのために、いつもため息をつき、そつと涙をこぼして、からだは日一日とやせほそっていった。クルバンが、それを心配しないはずはない。ある日、やはりクマがいなとき、クルバンは、マリクにせがんだ。

「ねえ、おつかあ、はなしなよ！」

「いい子だから、聞くんじやないよ。おまえがわかったって、どうにもならないんだから。ひよつとして、悪いことでもひきおこしたら……。」

クルバンは、マリクのふところにしがみついて、おつかさんをゆきぶりながら、「おつかあは、いつもこうなんだ。聞いたっていわないし。どうしたっていわない



んなら、おら、このばで死んでやる！」

マリクは、クルバンが、気がつよく、一度いいだしたらかならずやりとおすことを、よく知っていた。クルバンがいなくなったら、どうしよう？……

そこで、マリクは、クルバンの頭をなぜながら、自分の身のうえばなしを話してきかせた。

「……わたしにも、おっかさんがいてね。一日だってはなれたことがなかったのに、ここに来てから、もう十年にもなるんだよ。おっかさんが、まだ生きているかどうかともわからない。わたしの家、わたしの村もどうなったことやら……どうして、クマなんかと、いつまでもくらしていけるもんかね……」。

マリクは、話すうちに、声をあげて泣きだした。

クルバンは、しばらく考えると、母をなぐさめて、こういいだした。

「おっかあ、泣くんじやないよ。おらたち、もうここには住まないんだ。村へ帰ろう。おらといっしょに。」

マリクは、あわてて子どもの口をふさぎ、おそろしそくに、ほらあなの入り口のほうをながめながら、

「ばかいうんじやない。クマに知られたら、ふたりとも生きちゃいられないんだか